
最低男

田村屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最低男

【Nコード】

N1397F

【作者名】

田村屋本舗

【あらすじ】

最低男の話中学生の性行為。狂った時代の狂った恋愛昭和最後のくだらない中学時代を生き抜いた子供たち中途半端な大人と子供の性

全五話

赤茶の髪

長めの段カットに

パーマをあてた

15才の女

噂は

あまり

いい話を

聞いた事がない

棒つき

アイスが

好きで

よく

食べ終わった

アイスの棒を

くわえた

けだるそうな

先輩だった

高校生の
彼氏が
居るとか

オヤジと
やるとか

男に
捨てられた
とか

男と関わる
噂は
切りがない

俺は
中1のガキで

女の不幸
話より

ただ
その女が
処女で
ない事に

興味があつた

エロ本を

めくるたび

女と重なり

女を見るたび

全裸を

想像した

部室の前で

先輩達と

溜まっていた時

空き缶を

くわえた女が

フラフラ

現れた

先輩に
もたれ掛かり

へらへら
笑って

「この子 貸して」

それが
女を

間近で見た
初めての日

シンナー臭い
女で

目の焦点が
あまり
定まらない

ルミと言う
名前だったが

漢字を
どう書くか
知らない

間近で
見ると

痩せた女で
制服に
体が
泳いでいた

2つ年上の
ルミが

子供みたいに
甘える

中1のガキに
甘える

「アイス買って」

挨拶もなしで
最初に
交わした
会話だ

60円の
コーラー味

溶けかけた
アイスが
袋から
出せずに

指先を
ベトベトにして

泣きそうな
顔で

「開けて…」

今でも

覚えている

頼りない

2つ年上の

ルミ

アイスを

食べる顔が

子供みたいで

俺は

ルミが

くわえていた

シンナーの缶に

口を付け

間接キスとか

もっと

ガキだった

腕に回した

ルミの手が

あまりにも
自然で

あまりにも
違和感が
なかった

初めて女と
腕を組んだ
はずなのに

緊張もなく
とても
自然で

体に身につける
部品にすら
思えた

多分
子供同士

まだ

子供同士

だったに

違いはない

ただ

ルミが

処女でない事で

男性を

受け入れた

余裕が

焦りを

感じなかった

ドキドキも

ワクワクも

何も

なかった

一目惚れ

そんな
綺麗な言葉では
ない

ルミは
感じ取ったんだ

俺を見て
全身で
感じ取った

自分と
同じ
寂しい
人間を

「好き」
「嫌い」

そんな
単純な気持ちさえ

何も
抱かなかった

腕に巻き付く
ルミから

安心感を
感じていた

妙な話だ

誰も居ない
整然とした
アパート

雑然とした
ルミの部屋

薄いカーテンを
閉めても

日差しが

差し込む
夕方前

制服を
脱ぎ始めた
ルミが

ベットに
横になる

何も
言葉もなく

誘われるまま
ベットに
座った

飛びつこうとか
やれるとか

頭に
なかった

ブラウスの
ボタンを

覚束ない指で
開けるルミが
もどかしくて

ボタンを
外した

ブラウスから
ブラジャーが
見えても

興奮しないのは
姉貴が
居るから
なのだろうか

想像力が
エロ本の
ペラペラな
写真だから

なのだろうか

ルミの手が

俺の手を

ブラジャーに

押し当てた時

指先に

触れた

乳房の

柔らかさに

俺は

夢中で

ルミの胸を

揉みくちやに

していた

指の跡で

白い乳房が

赤くなるまで

無我夢中だった

「…痛い」

ルミが

泣いてる事に

気付いた

慌てて

ブラウスを

閉じて

ルミの

胸を

隠した

虚ろな

表情で

涙だけが

顔の真横に

流れ落ちる

「ごめん
ごめんな」

ルミの
涙を拭きもせず

オロオロと
謝る事しか
出来ずに

ただ
ルミの顔を
見ていた

ルミの
涙の意味は
わからない

痛くて
泣いたのでは
ない事くらいしか
わからない

過去の男を
思つて

泣いたのか

性行為に

泣いたのか

わからなかった

ブラウスを
開けたまま

ベットから

降りたルミが

角を凹ませた
空き缶に

茶色の

オロナミンCの

瓶から

シンナーを

注いだ

何かから
逃げたい
訳じゃない

何も

感じたく
ないだけの
シンナー

あつという間に
過ぎる時間

二人で
ベットに
座ったまま

ただ
並んで
過ごした

感覚の
麻痺する

脳

虚ろなまま
足を摩る
ルミ

煙草一本
吸うにも
何度も
灰皿の位置を
確かめる

薄暗くなつた
部屋の中

煙草の火種を
眺めていた
ルミが

指先で
火種を
落とした

オレンジ色の
ビー玉が
転がる

ほんの
小さな火種が
巨大化してゆく
感覚

慌てて
火種を
握り潰した

「何やってんだ」

ルミを
腕で押すと
ルミの胸が
腕に触れた

空き缶を

くわえたままの

ルミを

押し倒し

缶の中の

シンナーを

口の中に

含んだルミが

起き上がり

液体を吐き出した

舌を出して

何度も

唾を吐くルミ

俺は

構わず

ルミを

倒し

乳房を

揉み上げ
乳首に
吸い付いた

現実と非現実が
混ざり合う

ビデオの様に
揺れ動く
画像と

皮膚を摩る
感触

重ね合う
体が
熱くなる

濡れているとか
感じているとか

体の仕組みを
考える事もなく

降ろした

下着を

ルミの足の長さ分

脱がす事すら

もどかしく

開いた足に

夢中で

押し当てた

何度も

恥骨に当たり

ルミが

指先で

膣の入口に

誘導してくれた

ルミの中

熱く包み込む

性器

何も

わからない

顔をした
ルミが

揺れながら
天井を
眺めていた

初体験

世界で一番
寂しい女を
抱いた気がする

誰かを
忘れたかった
だけのだろう

誰かを
思い描き
抱かれて
いたのだろう

ルミと

何度となく
体を重ね

愛情もなく
交わる

無抵抗の
敗北

俺は
一度だけ

ルミの両指に
指を絡めて

ルミの手を
握りながら
抱いた

ルミの心が
知れたかった

ルミの
答えは

泣きながら
「嫌」

そう
連呼した
だけだった

俺でなくても

良かったんだろう

捨てられた男の
代わりに

手頃なガキを

摘んただけだ

上手に

遊べる誰かに

俺を選んただけに
過ぎない

恋愛もまだ
覚える前に

女の寂しさを
見せつけられた

たった2つ年上の
わずか15才の女が

俺には
追い付けない
寂しさを
背負っていた

あれから
20年以上経ち

俺は
今だに

女性を
抱くたびに

指を絡める癖が
直らない

指先を
絡め

握りながら

目を閉じて
抱かれる
女の顔を

確認して
いるのだろう

≡ E N D ≡

第二話二人目の女

平凡な女

そんな
印象が
ある

名前を言われても
ピンと来ない
女だった

中3が
卒業して

俺等も

中2に

進級した

卒業生から

受け継がれる

制服

印象の薄い

平凡な女が

先輩から

引き継いだ

制服を着て

髪を染めた

中学デビューと

陰で

笑われ

パシリに

されていた

それでも

段の細かい

長いスカートが

似合う女だった

脱処女のドラマが

流行った頃で

彼氏

彼女の

カップルが

何組みか

出来初めていた

先輩と

付き合う女

後輩と

付き合う男

先輩後輩の

隔たりが
なくなりだしたのも
この頃だろう

覚えてたの
メイク

覚えてたの
コロン

茶色に
染めた髪が
綺麗だった

パーマを
掛けない
サラサラの髪

煙草も
シンナーも
一切やらず

容姿だけの
不良娘

そんな所だろうか

友達の
家で

意味もなく
たまり

くだらない
話を
ただ
繰り返していた

初めて
話したのは

多分
友達の家
だったと
思う

「坂入」

確か

そんな名字だった

「同じ中学だよね」

そんな

言葉を

掛けられた

同中と

言うだけで

仲間意識を

持たれたらしい

馴れ馴れしい

言葉は

まるで

何年も連れ添った

仲間の様に

感じた

情報を

手繰り寄せる

「ルミ先輩と
付き合ってたって
本当？」

さあ

首を横に
捻って
見せた

坂入の興味は
「ルミ先輩」

あれこれと
俺の知らない
ルミを
語る

数々の
男性遍歴まで

噂好きの

女が

苦手に
なつた

たまたま

坂入が

語つた事で

噂は噂として

語り継がれている事に
嫌気がさした

あまり

いい印象は
持たず

ただ

同中と

言うだけで

当たり前の様に
傍に座る女

性体験に
興味が
あるのか

ハタチで
処女とか
ありえない

何回目の
デートで
キスをしたい

そんな
ドラマ仕立ての
夢物語を
よく語る

部屋に
座っていても
着崩さない
制服

足の爪先まで
スカートで
隠し

薄化粧に
甘い匂い

生意気な
言葉とは
裏腹に

操を固く
守る姿が

なんとなく
可愛いく見えた

目障りな
中学デビューの女

そんな

イメージが
坂入に
ついた頃

女同士の
いざこざが
起きていた

他中の3年
少し

イカレタ
金髪の女に

坂入は
煙たい
存在になり

後輩達の前で
シメラレタ

そんな噂が
流れた

数日

会わなかった

坂入の姿を

見たのは

学校の

廊下で

擦れ違った

時だった

俯き加減で

通り過ぎる

坂入が

少し頭を

上げて

生意気な

笑顔を

作り

「エッチしようよ」

多分
都合がいい
男だったに
違いない

やり切れない
心を
ぶつけるには

手頃な男
だったのだろう

「いいよ」

テキストに
返した

ホテル代わりに
使っていた
後輩の部屋

自宅裏に

設置された

プレハブ小屋

鍵を

借りに

行くと

坂入が

顔を伏せて

背中に

隠れた

無言で

ついてくる

坂入

途中で

立ち止まったら

何も言わず

置いて

行っただろう

隙間風の
吹き込む
プレハブ

赤く薄い床に
砂利が散らばり

潰れた

マットレスに

寝起きのままの

布団が

敷いてある

後輩の部屋

ベットに

座ったまま

脱がしてゆく

制服

下着姿に
なった
坂入が

寒そうに
掛け布団を
手繰り寄せ

肌を
隠した

『何回目の
デートで
キスをする』

そんな
会話を
していた
坂入の乳房を
揉み上げ

キスもなく

ただ

乳房に舌を
這わせた

たつた
一言

たつた
一言

「やめて」

そう
囁いたら
やめる
つもりだった

性器を
指先で
触れた時

坂入の体が
硬直し

表情も

硬く

困惑した

目線で

俺の顔を

見ていた

濡れ慣れて

いない

性器

唾を

垂らした

指を差し込むと

小さく

「痛い……」

と 呟く

指を

入れたまま

「やめるか？」

そう聞くと

坂入は

首を振った

黙って

俺の後を

ついて来た時から

覚悟を

決めて

いたのだろう

挿入した時

緊張が

途切れたのか

悲痛な声で

「抜いて！」

と叫び

体を

ばたつかせる

ゆつくりと

抜くと

亀頭に

鮮明な血液が
ついていた

「ごめん」

処女を

失う事で

体の一部が
傷つく事を
知らなかった

鮮明な

赤い血液を
拭きながら

布団に

潜り込む

坂入を
見ていた

制服を
渡し

着替え
終えるのを
待つて

後輩の
部屋を
出た

帰り際
ベットを

直す仕草が
坂入らしい

黙って歩く
帰り道

照れ臭そうに

「まだ中に
入ってるみたい」

と笑った

わずかな秒数
確かに

坂入と体を
重ねた証拠が
そこにあつた

何かが
ふっ切れたの
だろう

格好つけて
背伸びをする
坂入が

先輩から
譲受けた制服の
ボタンを
外し

着崩した

「ねえ

もう処女じゃないよね」

坂入が

声を掛けた

さあ

俺は

首を横に

捻って見せた

少し

伸びた髪

地肌に近い
髪が

黒くなりだした

不良に

なれない

不良に

憧れた

不良娘

後輩に借りた

部屋の鍵

元々

鍵など

掛かっていない

部屋だと

知っていた

わざわざ

借りに

行ったのは

坂入と言う

女の名前を
覚えさせる為

抱く
抱かれる
より

「やった」
と言う事実が
ひとり歩きをする

その為に
坂入が
俺を誘った事は
わかっていた

後輩の前で
他校の女に
シバかれた
坂入

坂入の
プライドは
傷ついたに

違うない

最初に
交わした
会話

“ ルミ先輩と
付き合ってた？ ”

坂入は
ルミに
憧れていたに
違いはない

“ ルミを抱いた男 ”

そう
聞かれた
気がしていた

ルミの制服を
引き継いだ
坂入

ルミの生き方に
憧れ過ぎて
自分を
見失いかけた
坂入

ルミの制服に
着られていた
少女

あれから
数カ月

坂入は
ルミの制服が
似合う女に
変わった

ルミよりも
スタイルのいい
綺麗な女に

年上の彼氏が
居るとか
いないとか

いろんな
噂が
あつた

腰のくびれた
長いスカート

細い足首

いつしか
坂入は
後輩が憧れる
先輩になつた

噂は
独り歩きする

面白いほど

事実とは

異なる噂だけが

広まった

多分

ルミも

そうだったのだろう

≡ E N D ≡

第三話優等生の女

中三の修学旅行

班ごとに

行動する

厄介事を起こす

連中は

バラバラに

分けられた

名前と顔が

一致しない

クラスメイトと
行動する

退屈な

自由行動

ただ一言

「単独行動だけは
しないでくれよ」

そう

班長らしき

クラスメイトに

釘を刺され

意味なく
後を付いて歩いた

唯一

介抱された
土産品屋

待ち合わせ場所で
座っていると

ひとりの女に
ジュースを
渡された

優等生の
クラスメート

頭のいい女として
少し 知っていた

「つまらないね」

そう

呟いたのを
覚えている

肩を組んで

ふざけあつて

記念撮影を
している

他校の生徒が

楽しげに見えた

決まり 規則 ルール

そして

全体責任問題

その言葉に
牛耳られた
修学旅行

楽しいはずが
ないだろう

そして
同時に

見張り役の
優等生も

さぞかし
つまらない
修学旅行に
なっているのだろう

「記念に
お揃いのお土産
買わない？」

不意に
手を握られ
正直 驚いた

優等生の女

俺など
異性として
扱われて

いないのだろう

手の掛かる

ガキを

あやす様に

手招きをする

何軒か並ぶ

土産屋の

店先で

沢山

ぶら下がる

キーホルダーを

眺めていた

横で探す

優等生

丸い襟の

ブラウスに

規定のブレザー

折目が綺麗な

スカート

清潔そうな
ピンク色した爪が
新鮮に映る

【白井】

そうだ

確か

そんな名字だ

清潔そうな

清楚な名字が

似合う女だった

綺麗な黒髪を
ふたつ縛りに

背中へ

真っ直ぐ

垂らし

やや多めの
長い前髪を

横に流していた

純和風の
イメージが
ある

赤や茶や
金の髪をした
不良娘とは

あきらかに
人種が
違う

淡い橙色の
和風柄の布に
巻かれた

小さな
貝殻形の
キーホルダー

なんとなく

臼井の
イメージで
選んでいた

「可愛いね」

臼井が
貝殻キーホルダーを
受け取り

嬉しそうに
眺めていた

ひとつだけ
会計を済ませた
キーホルダー

「後で 選んで
渡すね」

お揃い土産は
お揃いではなく
交換する事に

いつの間にか
決まったらしい

修学旅行の
記念

そう何度も
言い包められ

記念撮影を
何枚か
並んで撮った

意外にも
よく話す
臼井

話すと言うより
よく語る女

知識豊富な

脳は

探究心と

想像力の宝庫

なのだろう

そして

修学旅行は

何事もなく

無事 終了した

修学旅行で

得た物は

優等生と

会話をした

それだけ

だろう

それは
意外な展開を
見せ

修学旅行後も
なんとなく
会話を
交わす事が
たびたび
あった

「お土産 渡したい」

単純な
誘い文句に

断る理由も
なく

呼び出された
公園に行き
そのまま
臼井の家に
行った

少し

ぶかぶかの

V字セーター

ゴム跡がある

ほどこいた髪

短めのスカート

優等生の

私服姿に

面食らう

何枚か

床に並べた

修学旅行の

写真を

肘をついて

俯きながら

眺める

セーターの
Vネックから

胸の谷間が
見えていた

「見える」

単刀直入に
告げた

俯いたまま
笑顔を消した
臼井が

頭を
起こした

真剣な顔で
呟く

「駄目？」

意味が
わからない

好奇心の
固まり

性行為も
優等生に
してみれば

答えを
得る為の
人体実験
なのだろうか

恥じらいもなく
服を脱ぎ

黒髪の女が
全裸で

ベットに

横たわり

背中を見せる

それは

優等生の女の

姿では

なかった

そこから先は

あまり

覚えていない

ただ

受け入れ体制が

とても 自然で

触れるたび

小さな声と

体を添わせる

滑らかな

動きが

演技派女優

気取りで

罪悪感は
なかった気がする

微かに
濡らした性器

押し込まれる
異物の感覚に

目を見開き
シーツを握りしめた

何度も
ゆっくりと
動かしていると

紅潮した
臼井が
淡々と

「いつていいよ」

学んだ知識で
得た台詞を
囁いた

性行為の
データーは
分析できたか？

俺は
処女だった
臼井の足を
肩に乗せ

一気に奥まで
激しく
突き上げた

必死に
シーツを
握り絞めた顔が

悲痛な表情を
浮かべる

実験データーは
正解な方が
いいだろう？

腹の上に
射精した精子が

臼井の髪まで
飛び

一瞬
歪んだ
臼井の顔が

本当の
感情なのだろう

それ以来

会話は

していない

勿論

目を合わす事も
なかった

≡ E N D ≡

第四話年下の女

細い坂道を
下り

河川敷に
ただっ広い
駐車場が
あつた

雑草が 伸びた
荒れ果てた
駐車場

ボロボロの
廃車が
何台か
放置してあつた

外灯もない
薄暗い駐車場

中3の俺達は
覚えてたの
バイクを
乗り回し

意味なく
何度も何度も
駐車場の中を
走り回つた

女達が

見物に来て

暇潰しに

持参した花火を
やっていた

パチパチと

光る花火

白い煙り

バイク音

荒れた駐車場が
遊び場になった

たまたま

後輩の女達が

真横で

線香花火を

していて

小さな

火の玉を

囲み

チリチリと

跳ねる光を

眺めていた

丸く膨らむ

火の玉

線香花火を

摘んでいる

女が 呟く

「触ったら熱いかな？」

そばに居る

女友達から

速攻で

ブーイングが

入った

一斉に

非難を浴び

女の手元から

火の玉が

ポトリと

落ちた

少し つまらそうに

燃えカスを

地面に捨て

また

線香花火に

ライターで

火をつけた

チリチリと

細かい火が

散る

火の玉が

膨らみ

パチパチと

音が鳴り

俺は

冗談半分で

近づき

火の玉を

握り潰した

しかし

呆気にとられた

女の反応は

意外にも

無反応で

俺の行動は

完璧に

無意味な状態に

なっていた

周りに居た
後輩達が
呆れ顔で

「何やってんすか？」

軽く
流され

線香花火を
持っていた女が

「熱くないですか？」

ようやく
言葉を
発した

後輩の彼女の
女友達らしく

いつも

二、三人の女達と
一緒に居る姿は
何度も見ているが

話をした事は
なかった

ボサボサな頭は
ショートカットに
していても

天然の
チリチリ髪で
綺麗な髪とは
言えず

面長の輪郭に
細い目

大きめの耳
痩せっぽち

お世辞にも
可愛い女では
なかった

【貴子】

そう 呼ばれて
いた気がする

たまに
友達の部屋などで
一緒になるが

つまらない事に
疑問を抱く
変わった女で

そのたび
女友達から
冷静な
ブーイングが
たびたびあった

今回も
そんな
ブーイングの後で

実際に

火の玉を
触ってやろうと

貴子を
からかうつもりで

俺は反射的に
火の玉を
握り潰していた

残念ながら
後輩達に
伝わる事も
なく

呆れられた
だけだった

その時は
まだ

貴子が
何を考えていたか
知らなかった

数日後

いつもと
変わらず
線香花火を
している
貴子が居た

ただ
周りに
友達の姿は
なく

ひとりだった

そばに

居るでもなく

離れて

いるでもなく

微妙な距離間

視界の端に

花火の明かりが

チカチカと

見える範囲に

貴子は 居た

振り返れば

貴子の様子は

すぐ見えるが

あえて

振り返らず

寝転ぶ事で

貴子との
距離は
微かに縮まる

何も明かりを
持たない
俺の姿は
貴子からは
見えにくかったのだろう

貴子は
線香花火に
集中していたのか

俺が
寝転んで
見ている事に
気付かず

オレンジ色の
火の玉を
丸く膨らませ

そして
ポトリと

地面に伸ばした
腕に
落とした

火薬と煙りに
混ざり

肉の焼ける
匂いがした

貴子の表情は
暗くて
わからないが

焼けた腕を
眺めている姿は
ハッキリと
かたどっている

数分経ち

また

ライターで

線香花火に

火をつける

なんとも

言えない

無力感

俺は

貴子の手から

線香花火を

取り上げた

ゆっくりと

立ち上がる

貴子の腕を

掴むと

無抵抗のまま

腕を

差し出す

腕に

何箇所も

黒く

焼け焦げた

火傷が あった

俺が

ふざけて

火の玉を

握り潰したからか？

だから

お前も

真似したのか？

貴子の理由は

わからない

わからないが

俺の安易な

行動が

引き金に

なっている
気がした

「帰れ」

貴子の腕を
離し
背中を押す

数歩
歩いた貴子が
立ち止まり

振り返った

「一万円」

折りたたんだ
一万円札を
開き

わざわざ

俺に見せ

「ホテル代」

突き出した

正直

イラついた

金を

奪い取り

無言のまま

駐車を

出て

坂道を

上がり

国道沿いの

道へ出て
タクシーを
拾った

初めての
ホテル

システムも
わからず

部屋にある
ホテル案内を
二人で読んだ

宿泊代金を
前払いし

浴槽に
湯を汲みながら

あちこち

部屋の中を
見て回る

話した事もない
貴子と一緒に

ふざけながら
探索していた

風呂に入り
薄いパジャマを
着て

ベットに
寝転がっていると

後から
風呂に入った
貴子が
色違いのパジャマを
着てきた

成長途中の
細い体

子供と大人が
混ざり合った
体型を している

女として
性欲を誘い出す
雰囲気は

まったく
なかった

ベットに
並んで
寝転び

パネルのボタンを
意味なく
触り

音楽を変えたり

照明を変えたり

いじくり回した

「あたし ブス」

突拍子もなく

貴子が

喋り出す

「好きな人と
付き合う事は
出来ないよ」

照明を 落とし
真っ暗にして

「これから先
つまんない男と
妥協されながら
付き合っんです」

照明が

薄暗く
照らされた

「惨めですよね」

ぼんやりとした
照明の中
貴子が
呟く

「最初くらいは
好きな人としたい」

貴子が
背中を向けて
ベットに
起き上がる

「冗談です」

俺は 咄嗟に
貴子の腕を
掴んでいた

ベットに

向き合って

座り

貴子の腕を

眺め

火傷の痕を

指先で 摩った

そして

唇を重ねる

正直

涙が 出そうに
なった

何回も性行為を
繰り返しながら

キスを したのは
初めてだったからだ

ゆっくりと
ベットに
押し倒し

誰よりも
丁寧な
愛撫をした

二人の息が
重なるのを
感じながら

初めて
避妊具を
つけた

薄いパジャマを
脱いで

俺の体に残る
ケロイド状の

火傷痕を

初めて
女性に見せた

ゆっくり
押し込むと

俺の腕を
握り締めた
貴子が

唇を噛んで
痛みに堪えている

「痛いかな？」

小刻みに
首を振る貴子が
愛おしくて

何度も
唇を重ねた

貴子に 合わせて
腰を動かし

細い貴子の
全身を
包み込む様に
抱き抱え

初めて
女性の中で
イッた

多分

初めて
女性を
【愛した】

心が

愛を感じた
瞬間だった

眠り込む

貴子の顔を

眺め

火傷した腕を

指で 摩り続け

【一緒に居たい】

何度も

寝顔に 伝え続けた

ページの編集 ページの削除

> > 1 7 3 < <

目を覚ました

貴子が

照れ臭そうに

「ありがとう」

淡々と服を
着替え

当たり前のように
部屋を
出て行った

女性を
抱くたび

【愛】を失う

≡ E N D ≡

第五話最低な男

露骨に

感情を剥き出し

【俺の女】

守れもしない
ガキな男が

抱いた女を
私物化する

【殴られる女】

と

【殴る男】

そして

【殴られた女】
を 拾う

俺が いる

惚れた

男の為に

泣き崩れる
女を

当然の様に
抱いた

「最低だな」

殴り倒され
唾を掛ける友人に

吐き捨てられた

言葉

俺の前で

お前の愚痴を
泣きながら
唱え

脚を開く女

お前に
伝えたかった
だけだ

俺に抱かれ

俺を
殴り倒す男に
愛を感じたか？

【私は 愛されてる】

実感 出来たか？

誠実な女

純粹に愛を
語りかける

頬を染め
想いを綴った
手紙を渡す

夢に憧れる少女

手紙の中身は
本心か

読まずに
わかる

「やらせてくれんの？」

手紙の中身は
全部 嘘だ

「最低」

それが 正解

多分 俺は

【愛され方】を
知らない

【愛し方】も
知らない

【愛】が
わからない

だから

【愛】が

苦手なんだろう

【愛】の為に

流された

涙しか

知らない

【愛】の為に

体を 差し出す

女しか

知らない

風の噂

【ルミの結婚】

意味なく
原点に戻る

60円の
コーラの
アイスを買って

ルミの部屋の
真下から

開いていない
窓に
投げつけた

祝福のアイス

「おめでとう
ルミ」

幸せに
なれよ

最後に
ひとつ

教えて
くれないか

【愛って
何だ？】

≡END≡

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1397f/>

最低男

2010年10月23日12時29分発行